Osaka University Knowledge Archive

Title	Diminished Facial Expression Despite the Existence of Pleasant Emotional Experience in Schizophrenia
Author(s)	岩瀬, 真生
Citation	大阪大学, 1999, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/41617
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【78】

氏　　名	岩瀬真生（いわせ まさお）
博士の専攻分野の名称	博　士（医　学）
学位記番号	第　14507　号
学位授与年月日	平成11年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 医学系研究科内科系専攻
学位論文名	Diminished Facial Expression Despite the Existence of Pleasant Emotional Experience in Schizophrenia （分裂病では快の情動体験は存在するが，表情表出は減少している）
論文審査委員	（主査） 教　授　杉田　義郎 （副査） 教　授　武田　雅俊　　教　授　吉峰　俊樹

論文内容の要旨

【目的】

情動鈍麻は精神分裂病において陰性症状の中核をなす重要な症状である。情動鈍麻は実際には表情等の表出により評価されるにもかかわらず，内的な情動体験の鈍麻であると信じられてきた。だが，これまでに情動鈍麻を情動体験と表情に分けて論じた研究は少ない。

近年，分裂病では表情が減少しているが，内的な情動体験の自己報告は健常者と同等であるという研究がいくつか報告されている。しかし分裂病では自己モニタリングの障害が想定されており，患者は情動体験を適切に自己報告できていない可能性がある。先行研究では自己報告の信頼性の問題は考慮されておらず，表情の測定にも定量性に限界のある方法が用いられ，問題点も多い。

本研究の目的は，自己報告の信頼性が比較的高いと考えられる分裂病の一群に注目し，表情の測定に信頼性の高い方法を用いて，分裂病の情動鈍麻を情動体験と表情表出に分けて検討することにある。本研究では表出パターンが他の情動に比較して一定であり，定量的測定に向く快の笑いを標的情動とした。

本研究が先行研究に比較して有利と考えられる点は以下の通りである。第一に情動刺激の数を十分に増やし，情動体験の自己報告と表情との相関関係を調べた。有意な相関がある被験者は自己報告の信頼性が比較的高いと考えられる。第二に表情の測定に表情筋筋電図を利用することで表情測定の定量性，客観性を向上させた。第三に検査前後の気分の変化を標準化された心理検査を使用して測定した。検査前後で快に関連した気分の上昇が見られれば快の情動体験の存在が示唆される。

【方法ならびに成績】

（対象）

DSM－IVにより診断された精神分裂病患者25名（男性11名，女性14名，平均年齢27.4±5.3歳），年齢，教育年数をほぼ一致させた健常者20名（男性10名，女性10名，平均年齢26.1±3.7歳）であった。本研究に参加した患者はすべて抗精神病薬を服薬中で，臨床症状，薬原性錐体外路症状ともに比較的軽度であった。全ての被験者に対し事前に研究の趣旨を十分に説明し同意を得た上で実施した。

（測定手順）

検査室内で被験者に情動刺激として60秒から90秒程度の低いコント20本からなるコミックビデオを視聴させた。情

動体験と表出の関係を調べる目的で以下の課題を施行した。

① 情動体験モニター課題（以下，体験課題）。10本のコントに対し視聴中に感じた快の情動体験を visual analogue scale により10点満点で評価する。

② 表情モニター課題（以下，表情課題）。10本のコントに対して視聴中の自分の笑いの量を visual analogue scale により10点満点で評価する。

検査前後の気分状態を日本版 Profiles of Mood State（POMS）を用いて測定した。POMS の下位尺度である「活力」は快情動に関連しており，活力の上昇は快の情動体験を示唆する。課題施行中に左大頬骨筋（笑いの主働筋），左眼輪筋（快情動に関連）の外側部，左皺眉筋（不快な情動に関連）の筋電図を測定した。大頬骨筋筋電図の平均筋放電を笑いの量とした。快の情動体験の自己評価点と笑いの量，表情の自己評価点と笑いの量との相関係数を両課題で計算し，有意な相関（$r>0.632$）の有無で有意相関群と無相関群に分類した。

（結果）

1．健常者と分裂病患者全体との比較

快の情動体験の自己評価点の平均値は健常者4.4±1.2点，分裂病4.7±1.9点で有意差を認めなかった。健常者ではビデオ視聴中の笑いの量は16.6±13.4μV の大頬骨筋平均筋放電に相当したが，分裂病では7.6±5.1μV で有意に低値であった。コミックビデオ視聴前の POMS の活力は健常者の50.6±8.3点と比較して分裂病では44.0±10.2点と有意に低値であったが，ビデオ視聴後の活力は健常者51.9±9.0点，分裂病47.0±10.9点で有意差を認めなかった。ビデオ視聴前後で活力は健常者では有意な変化を示さなかったが，分裂病では有意に上昇していた。

2．健常者と分裂病の体験課題の有意相関群との比較

分裂病の体験課題の有意相関群（13名）は情動体験の自己報告が比較的信頼できると考えられるが，快の情動体験の自己評価点の平均値は有意相関群で4.7±1.8点であり健常者と有意差を認めなかった。ビデオ視聴中の笑いの量は有意相関群8.1±5.5μV であり健常者と比較して有意に低値であった。ビデオ視聴前の活力は有意相関群46.8±11.3点，ビデオ視聴後の活力は52.4±10.5点でありいずれも健常者と有意差は認めなかった。ビデオ視聴前後で活力は健常者では有意な変化を示さなかったが，有意相関群では有意に上昇していた。これは自己報告が比較的信頼できる分裂病の一群に限っても，快の情動体験の自己報告，検査前後の活力の値，検査前後での活力の上昇という点から健常者とほぼ同等の情動体験の存在が示唆されるのに，表情が減少していることを示している。

【総括】

本研究では自己報告の信頼性と表情の測定法を改善した上で，情動鈍麻を情動体験と表情とに区別して検討することにより，分裂病では一般に表情が減少しているが，その中に健常者とほぼ同等の快の情動体験の存在が示唆される一群があることが示された。これまで情動鈍麻とは情動体験の鈍麻であると考えられてきたが，本研究の結果は従来の情動鈍麻の概念に修正を加えたといえる。

論文審査の結果の要旨

精神分裂病の情動鈍麻は陰性症状の中核をなし，患者の対人的，社会的能力を大きく損なう重要な症状である。従来，情動鈍麻は表情等の表出行動から評価されるにも関わらず，情動体験の鈍麻であると信じられてきた。しかし，情動には認知，体験，表出の３つの過程があるとされており，分裂病の情動障害をこうした視点から据え直す試みはこれまでされてはこなかった。本研究では，分裂病の情動鈍麻を情動体験と表情表出とを区別して検討し，情動鈍麻が情動体験の鈍麻とは限らず，少なくともその一部は表情表出鈍麻と呼ぶべきものであることを示している。

また情動はこれまで客観性が要求される科学的研究においてその方法論上の困難が指摘されてきた。本研究は情動体験の自己報告の信頼性の問題，表情の定量法に関して方法論的に独自の改善を行い，先行研究と比較して結果の信頼性は高いと思われる。

以上を鑑みてこの研究は分裂病者の情動に関する研究において重要な位置を占めると考えられ，学位に値するものと認める。